

## 地域アイデンティティの醸成に資する農業農村整備

### *Reproductive Function of Regional identity in Agricultural Infrastructure Improvement*

○重岡 徹\*, 山本徳司\*, 栗田英治\*

Tetsushi SHIGEOKA, Tokuji YAMAMOTO, Hideharu KURITA,

#### 1. 研究の背景・目的

農村地域の振興を語る上で、地域の内発的発展は不可欠の要件であり、その着実な展開は住民の地域づくりへの主体的な参加によって可能となる(小田切徳美 2006)。このためこれまでも地域計画策定プロセスでの住民参加や地域づくり活動への住民の積極的参加の促進にむけた数多の対策や手法の開発が進められてきた。住民参加の促進はさして新しい課題ではなかった。

しかしここに来て「住民参加の形骸化」(山本徳司, 2002 等)と称されるような新たなそして深刻な問題が現れている。それは、参加手法の開発や行政等の支援のあり方といったこれまでの住民参加論の枠組みでは対応が困難な課題のようである。すなわち、今日問われているのは 90 年代以降に深刻化してきた農山漁村地域における地域アイデンティティの喪失に起因する住民の地域づくりへの無関心や消極的対応という態度である。これは主体的な参加をおよそ実現しない受動的態度であろうし、このような態度のもとでは如何なる優れた参加手法や支援策をもってきても実質的な住民参加による地域づくりは実現し得ないであろう。本研究の問題意識はこの受動的態度に焦点を絞る。

#### 2. 研究方法

内発的発展の推進に向けて住民の主体的な参加を実現しようとするとき、実践的な住民参加のあり方についての検討(計画論的検討)と併せて、住民参加に前提する住民の地域(空間/環境)に対する能動的態度の醸成(主体論的検討)が図られなければならないであろう。本研究では、この能動的態度の醸成を地域アイデンティティの回復過程に求めた。地域づくりへの住民の主体的、能動的な態度は、地域住民の地域(空間ないし環境)に対するアイデンティティを基盤として醸成されと考えて、このアイデンティティを胚胎するものとして住民の郷土感情(Patriotism)に注目した。つまり、郷土感情がアイデンティティを育み、アイデンティティが住民の地域に対するインセンテ

ィブを喚起して、地域づくりへの主体的、能動的な態度を醸成していくという仮説を構築した。この仮説の妥当性について、文化的景観に配慮した農業農村整備事業を実施した本寺地区(岩手県一関市)と小崎地区(大分県豊後高田市)を事例として、整備が導入される前段階での住民の郷土感情の有り様、整備導入の有無を巡る郷土感情の揺れ、そして景観に配慮した整備内容の選択過程における新たな郷土感情の醸成—すなわち地域アイデンティティの醸成のストーリーを描いて検証を試みた。

#### 3. 研究成果

##### (1) 地域アイデンティティの契機としての景観

郷土感情は、「鐘楼のパトリオティズム」(橋川部文三, 2001)にあるように郷土の景観に強く結びついている。このことから郷土の景観が郷土感情を産み出し、郷土感情が地域アイデンティティを醸成していくと考える。

郷土の景観が地域アイデンティティの胎盤であるとするれば、景観の変容が地域アイデンティティに及ぼす影響は大きく、それは住民に地域アイデンティティの覚醒を促すであろう。

このような景観を地域アイデンティティ醸成の契機と見なす視点は、これまでの農村工学分野における景観研究が見落としてきた景観の果たす機能や役割を見いだすことになる。農業農村整備による基盤整備や施設整備は景観変容を不可避とする。その故に、変容を軽減抑制するための景観配慮への取組が求められている。それに対して本研究による推論では、変容そのものに積極的な意義を認める。結論的に言えば、景観が変容することで地域アイデンティティ醸成の機構が働き、住民の地域に対する主体性、地域づくりへの能動性が喚起する。ここに農業農村整備(事業が惹起する景観変容)の地域アイデンティティ醸成機能という仮説を推論できると考える。

##### (2) 地域アイデンティティの醸成ストーリー

農業農村整備による景観の変容が地域アイデン

\* (独) 農研機構 農村工学研究所

[キーワード] 地域アイデンティティ、郷土感情、景観変容

ティティ醸成に働きかける機能を捉えるために、本稿では景観に配慮した農業農村整備の計画過程における地域住民の対応過程を観察した。景観への配慮の具体的内容そのものではなく、当該整備によりもたらされる景観変容を軽減・抑制するための配慮検討の過程に着目した。

両地区において、郷土感情の根拠となる景観を変容する農業農村整備の導入は、住民の内的世界に、整備のもたらす果実と整備に伴う郷土景観の変更で被る郷土感情の痛みの相克をもたらした。それは社会的局面での整備推進（変容の受容）と景観保全（整備の抑制）という住民間の対峙となって現出していた。ここに住民の地域に対する対自性（主体性や能動性）発露（アイデンティティ醸成の契機）が見いだせる。そして、この対峙の調整過程（事業導入から整備における景観への配慮方法の選択に至るまでの住民合意のプロセス）に住民が関わる時に、住民の内的世界に農業生産性の向上、地域の振興そして郷土感情という3つ思いが想起されていた。これを住民の地域に対する主体的態度の発露と捉えることができる。

すなわち、本寺地区では、里地棚田保全整備事業により区画整備、農道改良整備、用排水路整備が導入されるのに対し、地域づくりという大きな枠組みの中で郷土景観を読み直すワークショップを重ね、景観保全を優先した「景観保全農地整備」対処方針に基づいて整備が進められていた。ここでは志向の対峙が郷土景観読み直し等の地域づくりワークショップに結実していくところに、住民の地域づくりに対する能動的態度の醸成が読み取られ、また地域アイデンティティの醸成は地区独自の郷土景観形成のあり方として「景観保全農地整備」の案出されたところにその一端を窺えた。

小崎地区は田園空間整備事業が導入される。事業導入前には整備志向の住民が大半を占めていたが、事業導入が具体化し整備内容を巡っての事業サイドと地区の協議が進んでいく中で景観保全を志向する住民も次第に増えていった。そこには協議過程に参加した県の文化行政部局や県内外の学識経験者が構成する委員会からの重ねての景観保全の主張が作用した。地区は、自治会による住民検討会を経て、住民代表と行政の農林部局、文化財部局および学識経験者で構成する協議会の設置を受け入れる。そして協議会は景観保全を基調と

する整備（区画形状は変更せずに道水路の軽微な改良）方針を選択した。ここでは協議会の設置ないし参加を受け入れる過程での自治会が開催した住民検討会に住民の郷土に対する主体性の発揮が認められ、それは地域アイデンティティ醸成の一因と見なしうる。

#### 4. 小括

農業農村整備事業の導入を巡っての景観保全志向と整備志向の対峙に至る過程は、一方において住民に郷土景観を対自させ郷土感情を揺り動かして住民の地域アイデンティティを醸成していく。これをプロセス的にみれば、文化的景観としての評価が郷土景観に対する住民の対自的なまなごしを覚醒する。それは評価を前にしての住民の郷土感情の揺れとしてあらわれ、そこに農業農村整備事業の導入という新たな郷土景観に対する働き掛けにより、揺れは事業導入にともなう郷土景観の変容に対しての具体的な態度—整備推進か景観保全か—形成へと発展する。この具体的な態度形成が地域アイデンティティを醸成していくという構図が推論できた。

これは本稿が仮説としていた農業農村整備事業による景観変更が住民の地域アイデンティティ醸成を促すという見取り図とほぼ重なり合う。とすれば、2地区のみの観察結果ではあるが、農業農村整備が導入されるということ自体が発現する地域アイデンティティ醸成機能というこれまで見落とされていた事業効果を示し得たと考える。

#### 【謝辞】

本研究は農林水産省農村振興局の委託事業「平成18年度地域に根ざした文化的な景観の整備・保全活用手法検討調査」の成果に多くを負っている。本調査検討委員会委員の藤本信義先生、広田純一先生をはじめ本寺地区、小崎地区の方々に多大なご指導ご協力を戴いた。ここに記し感謝申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 小田切徳美：地域づくりの論理と新たな展開，中山間地域の共生農業システム，pp170～171（2006）
- 2) 山本徳司：住民参加ワークショップによる地域景観づくりの実践と課題，村落社会研究24，pp38～39（2006）
- 3) 橋川文三：ナショナルリズム，橋川文三著作集9，pp12～15（2001）